

# 言語学とは？\*

平野尊識

キーワード：言語能力、規則性、音韻論、統語論、語用論

## 1. 言語能力：学ばずともわかっていること

Halle (1978) の論文に、次のようなものがある。

Knowledge unlearned and untaught: what speakers know about the sound of their language.

(「学ばずともわかっていること。言語の音声について私達が理解していること。」)

この論文のタイトルを、

Knowledge unlearned and untaught: what about speakers know about their language.

のように、音声だけでなく言語そのものにまで拡大したいところである。それは、言語学の役割が、「学んでいないのに持っている」言語についての知識とその根底にある言語能力を説明することにあるからである。具体的には、特定の言語現象に着目し、それを人間がどのようにプロセスしているかを明らかにすることから始まる。つまり、様々なデータの中から、何らかの規則性を見付けだし、それを分かりやすい形に定式化することである。またそれは、言語能力が人間の頭脳と密接に関係するという事実を浮彫りにするものでなければならない。

以下では言語現象の解明の具体例を示しながら、言語学の方法の一端を紹介したい。言語学の領域は、音韻論、形態論、統語論、語用論のように多岐にわたるので、分かりやすくするために、主に日本語から題材を取る。また、上にあげた言語学の各分野の理論的説明は控える。これについては、ユール(1987)などを参照して頂きたい。本論の目的は、あくまでも「言語能力」、「言語知識」の存在を具体例に基づいて明らかにすること、そして言語学への興味を喚起することにある。

## 2. 音韻論／形態論からの例

### 2. 1. 英語：複数を示す語尾

Halle(1978:299-302)では、英語の名詞の複数語尾の選択に関して興味ある議論が展開されている。ここでは、彼の説明に基づいて、人間の持つ言語能力の一端を明らかにしたい。ただし、説明の都合上、具体例は彼のものとは異なる。

まず、次の名詞を見てみよう。

(1) cap, ring, class, cat, dog, dish, book, sofa, church, ...

これらの名詞は、どのような形の複数形が後接するかによって、次の三つのグループに分けることができる。

(2) a. cap, cat, book, ...

b. ring, dog, sofa, ...

c. class, dish, church, ...

(2a)には[s]、(2b)には[z]、そして(2c)には[iz]が付く。ところで、(2)にあげた各グループには、それぞれ共通の特徴がある。つまり、語幹末の音声がそれである。(2)の各グループの語幹末の音声は、(3)の( )に示したような特徴を共有する。

(3) a. [s]: /p, t, k, f, θ/ ([ -voiced]): 無声(子)音

b. [z]: /b, d, g, v, ð, m, n, ŋ, l, V/ ([ +voiced]): 有声音

c. [iz]: /s, z, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ/ ([ +sibilant]): 歯擦音

(注: Cは「子音」、Vは「母音」を表す。以下においても、同様である。)

従って、この三つのグループの語幹末の音声は、( )に示したような自然類を構成することになる。

Halle (1978:300) は、これに対して、まず次のような規則化を試みている。

(4) a. If the noun ends with /s, z, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ/, add /iz/;

b. Otherwise, if the noun ends with /p, t, k, f, θ/, add /s/;

c. Otherwise, add /z/.

これらの規則は、示差的特徴に基づいて修正されるべきであり、実験的にもその妥当性が確かめられている(Halle 1978:301)。しかし、本論ではこの段階で留めておく。

ここで、話し手が持つ言語能力/言語知識の性格について述べておきたい。話し手は、一つ一つの名詞についてどの複数形が選ばれるのかを覚えたわけではない。彼らは、新しい名詞が語彙化されると、自動的に適切な形を選び出す。そもそも、全ての名詞を三つのグループに分けると自体、注目に値する(歴史的な理由から若干の例外はある)。各グループの語幹末の音声は、[iz]のグループは「歯擦音」、[s]のグループは「無声子音」(歯擦音を除く)、そして[z]のグループは「有声音」(歯擦音を除く)である。言うまでもなく、普通の話し手は、「歯擦音」、「無声音」、「有声音」などについての知識は持たない。この事例は、音声学を学んでいないにもかかわらず、彼らが音声についての知識を持っていることを示している。この事実は、注目に値する。これは、私達の言語能力がいかに神秘的なものかを示す一例であろう。

英語の複数形態素について、別の角度から議論してみたい。それは、生成音韻論的アプローチである。

私達は、環境の変化に自分達をうまく適応させながら、日常生活を送っている。寒ければコー

トを着たり、マフラーを身につけたり、また年齢を重ねて近くのものが見えにくくなると老眼鏡を用いたりもする。しかし、環境の変化にともなう適応は生きるための方便であり、私達自身の本質的な部分の一つも変わっていない。形態素の振るまいもこれと同様である。英語の複数形の場合、環境（つまり、語幹末の音声）をチェックして、それに相応しい異形態を選び出す。言語学者は、複数形態素の本質的な部分は何かを認定する。[s]か[z]か[iz]か、それともそれ以外の形式か。実際に現われる形の中から本来の複数形態素を選ぶ方が抽象的な議論を避けることができるので、ここでは[z]を複数形態素の本来の形式として設定する。コートを着たりすることを、環境に適応するための規則（音韻規則）と考えると、同じことが複数形態素の異形態の選択についてもあてはまる。

(5) a. 複数形態素の基底形： /z/

b. 規則：  $\phi \rightarrow i/s, z, \int, ʒ, tʃ, dʒ + \_\_\_$  ( $\phi$ はゼロを表す)

$z \rightarrow s$  / 歯擦音を除いた無声子音 +  $\_\_\_$

c. 派生：

基底形	foks + z	dog + z	kæɪt + z
$\phi \rightarrow i$	foks + iz		
$z \rightarrow s$			kæɪt + z
音声形	foksɪz (foxes)	dogz (dogs)	kæɪts (cats)

話者が音声学を学んでいるとは考えられない。それにもかかわらず、適切な複数形を選び出すことができる。これは、学んでいないはずの音声学の知識を、話者が的確に利用していることを示すものである。

## 2. 2. 日本語：過去／完了の「た」と「だ」の交替

英語の複数形の語尾の選択に似た事例は、多くの言語で見出だされる。これを形態音韻論的現象とすることができる。ここでは一例として、日本語の動詞の語幹に付いて、過去／完了（以下では「非現在」と呼ぶ）を表す「た」と「だ」の交替について検討する。非現在の形態素は「た」が基底形である。これは私達の直観とも一致する。母音語幹動詞の場合「た」が選ばれることも、この事を支持する材料となる（「見た」、「食べた」などを参照のこと）。

ここでは、どの様な条件で、「た」が選ばれたり「だ」が選ばれたりするのかについて考えてみたい。日本語の動詞は、母音語幹動詞と子音語幹動詞に分けられる。前者はいわゆる一段動詞に相当し、後者は五段動詞に相当する（カ変、サ変は考慮しない）。以下では、子音語幹動詞に限って考察する。また説明の都合上、具体例は数例に限定する。

(6) a. 非現在の基底形：/ta/

b. 規則：t → d/C([+voiced]) + \_\_\_\_ (ただし、有声子音のうち、rとwは除く)

c. 派生：

基底形	kak + ta	ut + ta	kog + ta	yob + ta	yom + ta
t → d			kog + da	yob + da	yom + da
other rules	kai + ta		koi + da	yom + da	yon + da
音声形	kaita 「書」	utta 「打」	koida 「漕」	yonda 「呼」	yonda 「読」

注意すべき点は、日本語の話し手が、一つ一つの動詞について「た」を選んだり「だ」を選んだりすることを覚えたわけではないということである。語幹末の子音の音声特徴に基づいて、それを決定しているだけである。語幹末子音が無声のとき「た」を選び、有声のとき「だ」を選ぶ。この語幹末子音の音声特徴は、習ったわけでもないし、教えられたわけでもない。語幹末子音が有声であるか無声であるかは、音声学を学んではじめて理解できることである。それにもかかわらず、「た」と「だ」を正しく使い分けているのは、言語能力/言語知識の实在を証明するものであろう。

### 2. 3. 日本語：「ウ」音便と両唇音

西日本方言の子音語幹動詞の中には、非現在の形態素が付いたとき、共時的に(7)の音声形に示したような変化を起こすものがある。この現象は、若年層、中年層の間では、殆ど観察されない。

(7) 基底形	kaw + ta	tob + ta	yom + ta	sim + ta
t→d (6b)		tob + da	yom + da	sim + da
other rules		tom + da		
音声形	koota 「買」	tooda 「飛」	yooda 「読」	syuuda 「染」

この現象もまったく規則的であり、話し手が各動詞ごとにこの現象が起こるか起こらないかを覚えたわけではない。この現象に関与しているのは、語幹末子音である。[w]も[b]も[m]も有声両唇音である。「買う」が非現在のとき、[koota]のように「た」を取ることで、また、[koota]「買」と並んで[kooda]「咬」が存在することを考えると、有声ということはそれほど重要な特徴ではない。(内的再建：「買う」の非現在形が、[koota]のように「た」を取ることは、その語幹末子音が、かつては無声の両唇音であったことを示している。このように、共時的資料から通時態の一面を再構成することを、内的再建という。) この現象に直接関与するのは、語幹末が

「母音+両唇音」という音の連続である。ここでも話し手は、母音、両唇音について特に教えられたわけではない。言語学者がそれに気付き、明示的に示したに過ぎない。話し手がその様な知識を内在化していると考えざるを得ないのは、このような理由による。

simuに関しては、simiruの方がより一般的である。この時の非現在形はsimitaである。taru「足る」についても同様のことが言える。taruと並んでtariruという形があり、その非現在形はtaritaである。

#### 2. 4. 日本語：音声形が同じでも基底形が異なる動詞（終止形の場合）

次の例は形態論の領域に入る。動詞の中には、終止形の音声形は同じでも、その構成が異なるものがある。

(8) 基底形	i+ru	ir+ru	ki+ru	kir+ru	su+ru	sur+ru
r→ $\phi$ /C+__		ir+u		kir+u		sur+u
音声形	iru	iru	kiru	kiru	suru	suru
意味	「居」	「要」	「着」	「切」	「為」	「擦」

(suru「為」の基底形には問題があるが、便宜的に上の様にしておく。)

音声形は同じでも、話し手はこれらの基底形が異なることを知っている。これらの非現在形が、それぞれ、ita/itta、kita/kitta、sita/suttaであり、それを無意識的に派生できることが何よりの証拠である。

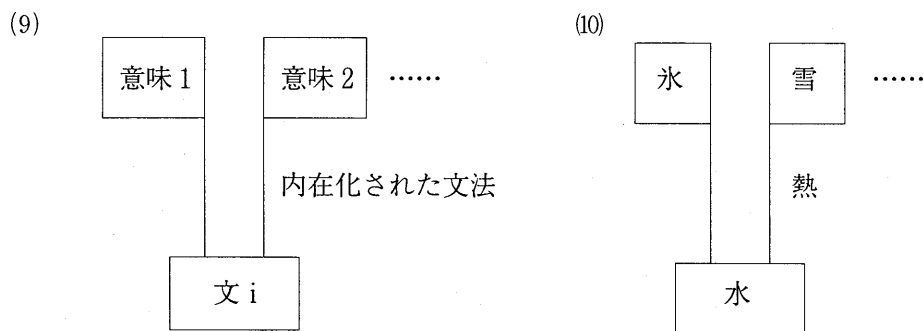
#### 2. 5. まとめ

以上の例は、私達が教えられなくても母語についての言語的知識を持っていることを示す証拠である。音韻論や形態論の理論的枠組みはかなり高度なものであり、話し手は言語学を学ぶまではその知識を持たないはずである。それにもかかわらず、適切な形式を導きだしていることは、彼らが音韻論、形態論について多くの情報を持っていることを示す。そしてそれは、教えられたものでもなく学んだものでもない。同様のことは、言語の他の分野においても言える。

### 3. 統語論/語用論からの例

一つの文や句が複数の意味を表すことが、しばしば観察される。このことは、私達の言語能力の一部に、ある文や句が複数の意味を持つことを識別するシステムが存在することを意味する。下の(9)はこの状況を図式的に説明したものである。(以下の(9)、(10)は、柴谷(他)1982:195による)。(9)は、本来異なる意味を持ちながら様々な規則の影響を受け、表面的には全く同じ音の連続として実現されるような現象を示している(ただし、アクセント、イントネーションに関する

差異は無視する)。これは、丁度(10)に示したように、「雪」や「氷」のように性質が異なるものが、熱の作用をうけて表面的には同じ「水」として現われるのによく似ている。



曖昧文の場合、以下のようにグループ分けしたが、全てがこのようにうまく分類できるわけではない。例えば、語彙的／統語的なものもあり、統語的／語用論的なものもある。

### 3. 1. 曖昧文

ここでは、言語能力の存在を、曖昧文の認識という角度から検討する。

#### 3. 1. 1. 語彙的曖昧文

いわゆる同音異義語を含む文がこのタイプに入る。しかし、文や句には文脈が付随しているので、誤解は生じにくい。

- (11)
- 京都大原三千院、恋につかされたおんなが一人（疲、憑）
  - ちょっと、よっていきませんか（寄、酔：スナックの看板）
  - あつかった（暑、厚、扱）
  - でんとうがある（伝統、電灯）
  - 週にさん回、スポーツをしています（週に3回、週2・3回）
  - 「・・・ゼミ」をやると、苦手な科目ができません（生じない、克服できない）
  - インドではこの様にスパイスは体にとっても良いと言われています（（心だけでなく、体に）ととても、とても：あるインド料理店で）
  - 見そこなった（見るのを忘れる、見込みちがいをする）
  - 私は家内に食べさせてもらっています（養ってもらう、現実に食物を口に運んでもらう、料理を作ってもらう）

#### 3. 1. 2. 統語的曖昧文

- (12)
- 花子と良子の家へ行った
  - 太郎と花子が結婚した（「次郎はまだだ」）

- c. 子供が好きなおばあちゃん
- d. Flying planes may be dangerous.

(a)には、「(私は)花子と良子と一緒に住んでいる家へ行った」という意味もあることに注意。(c)は文ではなく、名詞句である。

### 3. 1. 3. 語用論的曖昧文

このタイプの曖昧文は、文脈によって複数の意味を持つ文である。

- (13) a. ほくは鰻だ  
 b. ほくは博多だ  
 c. このお皿は300円です (回転ずし、陶器市)  
 d. あなた一、できましたよー (食事、赤ちゃん)

(13a)については説明する必要はない。(13b)には「ほくは博多の出身だ」という意味の他に、新幹線の車内での会話なら、「ほくは博多で降ります」、「ほくは博多から乗りました」などが考えられる(Shibatani 1992:370を参照のこと)。いわゆる「うなぎ文」は、この語用論的曖昧文の典型的な例と言える。

### 3. 2. 同義文

曖昧文とは反対に、同じ意味が複数の文によって表される場合である。このようなケースを同義的と言う。この状況は、(9)に示した図の上下を逆転し、文と意味を入れ換えることによって図示できる。従って、図式的な説明は省略する(柴谷(他)1982:197を参照のこと)。

#### 3. 2. 1. 語彙的同義文

- (14) 花子さんは、うちのOLです／花子さんは、うちの女子社員です  
 (15) 良子は長女です／良子はいちばん上の娘です

#### 3. 2. 2. 統語的同義文

これには、「語順の入れ換え」や「分裂文」などが含まれる。次の例を参照のこと。

- (16) a. あいつがその花瓶を割ったんだ  
 b. その花瓶をあいつが割ったんだ  
 c. その花瓶を割ったのはあいつだ

またこのタイプには、能動文／受動文の交替も含まれる。

- (17) a. The man broke the vase.  
 b. The vase was broken by the man.

能動文と受動文の使い分けは、それほど機械的ではない。主語の選択と、それと密接な関係にある名詞句の階層が機能しており、その意味で、語用論的要因を含んでいると言える（平野(1989)を参照のこと）。語用論的要因は、(16)においても観察される。

### 3. 2. 3. 語用論的同義文

名詞のチャンス／ピンチなど、動詞の勝つ／敗ける、売る／買う、教える／習うなどのようないわゆる絶対的の反意語は、同一事象を異なる視点からとらえたものである。この場合、どちらの単語が選ばれるかは、主語／題目の選択による。ここでは、動詞の「勝つ」／「敗ける」を例にして説明する。次の文は、ホークスとライオンズが試合をしている場面である。

(18) a. 城島がホームランを打って、ホークスが勝った

b. 城島にホームランを打たれて、ライオンズが敗けた

(18a)と(18b)は同じ状況を表している。しかし、(18a)の話し手はホークスのファンであることが理解できる。つまり、話し手の「視点」はホークス側にある。一方、(18b)はこれとは逆に、ライオンズ側にある。（「視点」については、(久野 1978『談話の文法』大修館)を参照のこと。）

## 4. 意味論からの例

ここでは意味的事象を題材にして、言語能力、言語知識の存在を例証する。「意味」の違いが「形式」の使い分けと対応していることに注意。

### 4. 1. 日本語：補文標識の「こと」と「の」

益岡（1993:106-8）には、次の様な例文が提示されている。

(19) a. 幸司は孝子を地下街で見かけたこと／のを思い出した

b. 先場所左足を痛めたこと／のが気がかりだ

(20) a. 一度みんなの意見を聞いてみること／\*のを提案した

b. 孝子は幸司が新車に乗っているの／\*ことを見かけた

文末に現われる動詞と「こと」と「の」の共起関係を調べた上で、益岡（1993:107-8）は、両者の意味の違いを次のように説明する。

(21) a. 「こと」：「ある事の実現を期待する」意味を表す動詞と共起する。

b. 「の」：「視覚や聴覚のような」感覚を表す動詞と共起する。

両者の関係は次のように図示できる。

(22)

A	B	C
期待動詞		感覚動詞



Aは「こと」しか使えない領域、Cは「の」しか使えない領域、Bは両方が使える領域である。同様の事は、「の」を伴った補文を含む主文の動詞を見ると、「見る」・「聞く」を中心とした感覚動詞が多い」（柴谷 1978:77）のように、既に柴谷(1978:67-79)においても指摘されている。しかし、問題はいつも「イエスかノーか」で解決できるわけではない。柴谷(1978:78)も指摘しているように、「総ての「こと」・「の」の用法を、補文の表す事柄が抽象的なものか具体的なものかということのみで予測するのはむずかしい。」(22)においてBの両端が点線によって表されているのは、その事を示したものである。

#### 4. 2. 日本語：二項述語に現われる「に」と「と」の交替

- (23) a. 太郎は花子にキスをした  
 b. 太郎は花子とキスをした  
 c. 太郎と花子はキスをした

(23a)は「太郎の方から花子にキスをした」という意味であり、(23c)は「太郎も花子も（お互いに同意して）キスをした」という意味である。(23b)は意味的に(23c)に近いと言える。このことから、「に」が行為者の一方的な動作、「と」が行為者と被動者の相互的な動作を表していることがわかる。次の例を参照のこと。

- (24) a. 太郎は花子と／＊にデートした  
 b. 太郎は花子に／＊とデートを申し込んだ  
 (25) a. 太郎は花子と／＊に結婚した  
 b. 太郎は花子に／＊と結婚を申し込んだ  
 (26) a. 太郎は花子を／＊と抱いた  
 b. 太郎は花子と／＊を抱き合った

この事は次の(27)、(28)からも明らかである。(27b)の「待ち合わせて」というのは相互的な動作を表し、(28b)の「わざと」は太郎の一方的な動作を表していると考えられるからである。

- (27) a. 太郎は街で偶然花子に／と会った  
 b. 太郎は待ち合わせて花子と／＊に会った  
 (28) a. 太郎は花子に／とぶつかった  
 b. 太郎は、わざと、花子に／＊とぶつかった

また、「一方的な動作」は、「一方向的な動作」と言った方がよい場合もある。次の例文が可能なことに注意。

- (29) 花子がOKしたので、太郎は花子に／とキスをした

「一方的」と「一方向的」という概念については、これ以上立ち入らない。ただし、「に」が与格の場合を含めて、方向を表すことが多いことに注意。いずれにせよ、「と」が可能なのは、被

動者の同意が前提にある場合と言える。

以上の考察を図示すると、次のようになる。

(30) 意志的な動作		偶然の出来事
「と」	「に」	「に」／「と」
相互的	一方的	一方向的／両方向的

「に」と「と」の問題については、(久野 1973『日本文法研究』61-4 大修館)を参照のこと。

#### 4. 3. 福岡市方言：「・・・きる」(能力可能)

英語のknowやseeは、進行形の-ingを取らない。それは、これらの動詞に「状态的」という意味が内包されているからである。福岡市方言にもこれと似た現象がある。「・・・することができる」という能力を表すのに、例えば「食べきる」、「泳ぎきる」のように言う。しかし、この「きる」はどんな動詞にも付くわけではない。「知りきる」、「わかりきる」、「見えきる」、「聞こえきる」というような言い方はできない。「きる」の付加には、[±状态的]ではなく、[±自制的]という要素が深く関わっているようである。つまり、その動作を自分でコントロールできるかどうかということである。英語の-ingの「状態性」の根底にも、「自制的性」が関与していると言えよう。

(31) a. [+自制的] : 起きる (起ききる)、焼く (焼ききる)

b. [-自制的] : 起こる (\*起こりきる)、焼ける (\*焼けきる)

東京方言の「・・・きる」は、「・・・し終わる」、「完全に・・・してしまう」のように、動作の完遂を意味するが、福岡市方言ではここに示したような意味で用いられる。勿論、両者には接点があり、福岡市方言の用法は東京方言的用法から派生したものと思われる。これは文法化の一種とみなすことができる。(文法化：例えば、複合動詞の語尾が助動詞に変化する現象のように、語彙的要素が文法的要素へと変化する現象。) 次の例は、その派生を推測する上で参考となる。

(32) 今日の寺尾関は、(完全に) 自分の相撲を取りきりましたね

#### 5. おわりに

以上、言語を構成する各分野から具体的な言語現象を選び出し、言語能力の实在を例示した。統語論／語用論に関しては、曖昧文と同義文の認識に話題を限定した。それらがどのような規則によって具体的な文として実現されるのか(これを「派生」と言う)については、生成文法の文献を参照して頂きたい。話し手／聞き手は、「学んでいないのに持っている言語的知識」、すなわち、言語能力／言語知識に基づいて、母語を発話し、理解している。言語の研究は、この知識とその根底にある言語能力の解明にある。私達は、この言語知識／言語能力の解明に向けて、様々

な理論的説明を試みる。そのためには、母語に対する内省や直観を重視しなければならない。言語学の進展のある段階までは、研究の中心はもっぱら統語論にあった。しかし、「視点」の問題に関連した主語や題目の選択なども、私達の言語知識／言語能力の一部である。現段階の言語研究は、このような広い意味での言語知識／言語能力の解明を目指している。

言語能力の解明は、正しい、適切な言語資料に基づかなければならない。このことは、何も日本語の研究に限らない。資料と理論は表裏一体である。しかし、資料無くして理論は構築できない。まず資料の中から注目すべき言語現象を見付け、次にその本質を明らかにし、適切な理論を組み立てることが大切である。そのためには、多くの言語を観察し、問題点を見付けだせることが重要である。私達は普段からこの言語的センスを磨くことを怠ってはならない。

\*本論は最初、早田輝洋先生の還暦記念論文集のために書いたものである。残念ながら、その論文集は出版されないことになった。所期の課題は、専門家にも役に立つ言語学の入門書という非常に困難なものであった。原稿は1994年の夏に一応完成していた。その後、言語学概論などの講義で数回用い、改訂を試みた。内容的には十分意を尽くせないところもあるが、今回このような形で発表した。従って、最初に要求されていた練習問題もそのまま残しておいた。不十分なところは、本文でも述べたように、ユールの「現代言語学20章」、またその書物に付された参考文献などでカバーして頂きたい。Hudson (2000) も有益である。

#### 参考文献

- 柴谷方良、影山太郎、田守育啓 1982.『言語の構造 — 意味・統語篇』くろしお出版。
- 柴谷方良 1978.『日本語の分析』大修館。
- 平野尊識 1989.「能動文／受動文の交替と名詞句の階層 — 日本語・英語・インドネシア語を例にして」『文学会志』(山口大学) Vol.40, 215-219.
- 益岡孝志 1993.『24週日本語文法ツアー』くろしお出版。
- ユール、ジョージ(今井邦彦・中島平三訳 1987)『現代言語学20章』大修館。
- Halle, Morris. 1978. Knowledge unlearned and untaught: what speakers know about the sound of their language. In: Halle, Bresnan and Miller (eds.), Linguistic theory and psychological reality. 294-303. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hirano, Takanori. 1994. An introduction to language and linguistics. (Ms.)
- Hudson, Grover. 2000. Essential introductory linguistics. Oxford: Blackwell.
- Shibatani, Masayoshi. 1992. The languages of Japan. Cambridge: Cambridge University Press.

練習問題：

(1) 次の三つの文における「と」の関係について、考察しなさい。

- a. AがBと会った
- b. AとBが会った
- c. AがBとCの所へ行った（この場合の「と」は、「一緒に」という意味である。）

(2) 次の文を参考にして、「・・きる」が、福岡市方言において能力可能の意味を獲得したプロセスを推測しなさい。

- a. 今日の寺尾関は、完全に自分の相撲を取りきりましたね
- b. よく向こう岸まで泳ぎきったね

本論のまとめ

「言語学は何を明らかにしようとしているのか」ということについて、分かりやすく書いたものである。言語学の入門的なところはあるが、身近な具体例のなかに、かなり高度な理論的内容を盛り込んでいる。具体的には、次のような内容である。話し手／聞き手は、「学んでいないのに持っている言語知識」に基づいて、母語を発話し、理解している。まず、言語知識を私達が「学んでいないのに持っている」ことを例示し、この知識とその根底にある言語能力の解明こそが言語学の目標であることを強調。この事を、音韻論、統語論、語用論などから具体例を上げ、解説した。音韻規則、曖昧文、視点と主語の選択などについて議論を展開した。言語学への興味の喚起と本格的な言語研究への道を促すためである。取り扱う言語現象は、主に日本語から取った。